

3rd International Conference on Chemical Thermodynamics

に出席して

(織高研) 森本 敏

2年に一度のIUPAC主催の化学熱力学の国際会議が1973年9月3日より6日まで、ウィーン郊外のバーデン市で開催された。筆者はちょうど在欧していたので出席する機会を得た。この会議は第3回で、今回は高温における物理化学技術のシンポジウムが併催された。

ここバーデン(Baden)はウィーンの南方約30 kmに位置し、著名なウィーンの森を西北部に接した休養と保養の温泉地として知られている。温泉とはいっても36℃までの硫黄(硫化水素)泉で、リューマチに効くといわれ利用も多いであろうが町全体に硫黄の気を感じずこともない。ただ、町の中と近隣に鉱泉を利用した広大なプールがあり、外観からその気を感じさせてくれる。会場となった町の北端のKongresshausに隣接してKurparkがあり、山に続く。憩と散策の人々が集まるこの公園にはベートーベン、シューベルトの記念聖堂があり、毎日野外で楽団の演奏を聞くことが出来る。町のはずれにはスポーツ施設も多い。また、カジノ、速歩競馬などの施設も立派である。バーデンはウィーンの人々の憩の場を提供しているのであろう、比較的便のよい郊外の保養地という感じがする。ここに前記高温関係への出席も含めて登録人員330余名、おそらく約400名の人々が国際会議に参加すべく集ったであろう、そこそこで参加者と顔を合わせる。本邦からは、関集三教授と神戸博太郎教授が参加・ご発表にお出でになっておられた。

この会議での発表件数は、高温シンポジウム関係の36件を除いても205件、それに6件の総合講演と、非常に盛り沢山で多くの発表に接したという印象をうける。プログラムは本誌51頁以下に全部掲載してあるので、御参照願いたい。講演内容の詳細は平均約200~250頁の予稿集8冊に収められており、内容をお知りになりたい向には大いにご参考になるであろう。

会場のKongresshausは会議場として、また、コンツェルト、オペラなどの観賞場として建てられたものである。そのKongress-saalは500席を有し、総合講演とセッション4,5,8の講演発表会場に当てられ、その他に同じ建物内のBadener Saalと称される部屋が、150席ほどであろうか、発表会場として使用された。これは、ちょうど本邦における熱測定討論会の会場と割り振りは異な

るが良く似た感じの会議場運営である。大多数の参加者は何れかの会場に流れ、大会場に比べて小会場は座席数が少なく窮屈であった。4日間の割り振りは、前夜のInformal Gatheringに始まり、第1日目の午前：開会、総合講演と発表講演、午後：発表講演、夜：オペラ観賞、第2日目と第3日目の午前：発表講演、夜：総合講演、第4日目の午前と午後：発表講演、夜：Receptionである。比較的ゆったりとしたスケジュールのような気も参加前にはしていたが、これだけの講演数と規模をもつだけに運営する方々の労も大変であろうが、参加者も結構スケジュールに追われるものである。

Informal Gatheringはたしか市長主催であったと思う。会場に付随したレストランで、前夜約2時間のカクテルパーティが行なわれた。レストランで、ちょうど夕食時に行なわれたのであるから何らかの食事を期待するのも当然であるが、当てがはずれてホテルでも町中でもレストランは開いてはおらず当惑気味の人が多かったようである。オーストリアというところは概してこのような運営が得意でない国柄か、筆者らの感覚が異なるのか、比較的指示に適確さが足らず困惑させられることがしばしばであったことも事実である。翌日からは、開会式、祝詞演説のあと、講演と討論が行なわれた。筆者は総合講演と3,4,8,9,10の部門に出席した。比較的気軽・気儘の聴講と自認していたが、国際会議特有の各国からの著名な第一線の方々の発言と、その仕事の紹介、講演に魅了されることもしばしばであった。2日目第3部門で、神戸教授の“Enthalpy and Entropy of Fusion of Several Heterocyclic Oligomers of the Heat-Resistant Polymers”、関教授の“Existence of Plural Glass Transition Points in Single Compd. Revealed by Calorimetric Method”と題する発表講演がなされた。質問者も多く、両教授とも要点を丁寧に説明になっておられた。とくに後者では、質問に応じてその現象の新奇性、特異性を歴史的な面からもお話になり筆者も講義を受けた思いであった。

日本における熱測定討論会に関してもしばしば多くの人が触れているように、この種の会合・討論は研究対象となる物質とその状態、実験条件、現象も多岐にわたり、

その印象をと改まっていわれても、自己中心的なことが多く難題である。一般的な印象をといえば、理論での、欧米人にその傾向の強い自己のオリジナリティーを固執しての個性的な活潑な質疑応答や、非常にしっかりした、また伝統的な測定基盤の上に立った測定と、結果、解釈、研究の方向などがかなり明瞭に浮き彫りされていたようである。一般に、莫然と、学ぶべき点が多いように考えるのは筆者の皮相的な浅薄な物の見方の誤りだけでもなさそうに思われる。その逆に、複雑な現象を何と単純化した個性的な追求の仕方であろうと感ずる点も筆者には多々あった。これも、仕事が集積された晩にはその現象の解明に非常に大きな貢献をしていくであろうが、その方法論、物の考え方の民族性、地方性のようなものも多分に受け取れないこともない。液体混合・表面エネルギーなどの測定結果などに関しても、解釈し難いとか、どうも解釈出来ないなどという発言が講演者自身の口から卒直に多々発せられていた。これらの点も案外この会議の特徴かもしれないし、発展につながる問題でもあろう。この会議の発表講演にはdiscussionと明記された発表が多い。本邦でも数年前から、主として講演数の増大に対処するために講演時間を長短2種類に分ける方法がよくとられている。この会議では、積極的な意味で討論に付

したい問題をdiscussionとして取扱っている。理論の正当性を問うべき問題や、客観的に正当性のある測定結果で現状で明確な解釈を与えることが困難なような結果は、むしろ発展につながる問題としてこの種の会議では重要な役割をはたすべきものであろう。時に応じて別室での討論の呼び掛けもいくつかあった。連日の晴天と暑さも加わり、Yシャツ、開襟、スポーツシャツとくつろいだ格好の出席者も目立ち、目を経るに従って打ちとけた会話も目立ってくる。最終日の夜は、その由来は筆者には不確かではあるが、バーデンから離れて近郊の古城でのレセプションであった。Perchtoldsdorf城と呼ばれるその古城での新ぶどう酒での宴席は、オーストリアの東部地方の長官の招待であったとか。惜別の宴は賑やかに夜遅くまで続いた。

西独から参加した筆者も、同様にご出席のマックスプランクの外林博士も所属はBRDということであった。近隣からの出席者の多いのは当然であるが、地理的な面も加わってか本邦からの出席者が比較的少ない印象を受ける。幸に、この国際会議を通じて斯界の発展と現状に大局的な観点からのご見解をお持ち帰りの両教授がおられるので、筆者は平板な出席・印象記を記してご容謝を願う次第である。

熱・温度測定と熱分析 1973年版

編集 熱測定研究会 B5版 140頁 定価1,800円(熱測定学会会員特価1,500円)
発行 科学技術社 〒113 東京都文京区湯島1-5-31第一金森ビル内 電話(03-815-8163)

内 容

1. 高温物性と熱測定(内藤幸爾)
2. 熱光度測定と誘電損失熱測定—高分子研究への応用(金子六郎)
3. Excess Enthalpies of Mixtures of Nonelectrolytes (G.C.Benson)
4. The Realities of Thermal Analysis (H.G.McAdie)
5. A System of Microcalorimeters (I.Wadsö)
6. Recent Development in Calorimetry and Thermochemistry at the National Bureau of Standards (G.T.Armstrong)
7. Metal Oxide の湿潤熱(森本哲雄)
8. acカロリメトリー法(八田一郎)

付 熱・温度測定および熱分析機器資料編

熱・温度測定と熱分析シリーズ	1969年版	定価1,200円	会員特価1,000円
(会員特価で御購入される場合は、	1970年版	" 1,500円	1,200円
直接弊社へお申込下さい。書店で	1971年版	" 1,500円	1,200円
は特価販売はいたしません。)	1972年版	" 1,500円	1,200円